

第62回神宮式年遷宮

お木曳き行事(第一次)と南木曾昼神温泉と妻籠の旅

平成二十五年に行われる式年遷宮、それに向けた三十にも及ぶ祭典・行事の中で、平成十八・十九年はお木曳き行事にあたり、本年は外宮への奉曳行事(陸曳き)が行われる。御杣山から伐り出された御用材を両正宮に曳き入れるこの神事は、元来、伊勢の旧神領民のみによって奉仕されてきたが、昭和四十八年の第六十回式年遷宮より、全国の崇敬者による奉曳が許されるようになった。本年、当県では三一一名からなる参宮団を結成、去る平成十八年六月四日、一日神領民としてこの神事に参加した。



街道中心に据えられた奉曳車



全国から奉仕団が集う



前日六月三日(土)伊勢に入る。
二見興玉神社にて浜参宮、心身を清め明日に備える。

四日午前八時三十分、一日神領民たちが集結、この日は一日神領民によるお木曳き行事の最終日にあたり、沿道には多くの人々が詰め掛けていた。



地元の方々のあたたかい歓迎を受ける。

第62回神宮式年遷宮

お木曳き行事(第一次)と南木曾昼神温泉と妻籠の旅

街道中央に待っていた奉曳車からは二本の引綱が据えられ、左右併せて約一、〇〇〇人の一日神領民達はその綱を握る。出発式の後、木遣り子達によって木遣り音頭が唄われ、いよいよお木曳き行事が始まった。

「椀成り(わんなり)」と称される、奉曳車の「フーン」という法螺貝にも似た大きく響く軋音と、先導に合わせ皆で声を揃えた「エンヤー、エンヤー」の掛け声が大きく響く中、引く綱に心を一つに合わせ、賑々しくも厳粛に御用財を奉曳する。途中何度か足を止め、木遣り子達の音頭に耳を傾ける。



木遣り子の先導で
お木曳き行事の開始



「エンヤー!エンヤー!」

はじめは穏やかだったこの神事も、終盤に差しかかるにつれて次第に勢いを増してゆく。

奉曳団、一日神領民、そして街道に詰め掛けた多くの人達も、皆一層大きく声を張り上げ、「エンヤー!エンヤー!」。奉曳車は最後のカーブを勢いよく曲がり一気に境内に曳き入れられる。距離にして凡そ八百メートル、一時間にも及ぶ神事であった。



終盤に差しかかるにつれて
次第に勢いを増してゆく。



無事境内に 歓喜の万歳



第62回神宮式年遷宮

お木曳き行事(第一次)と南木曾昼神温泉と妻籠の旅

その後外宮内宮にて正式参拝、神職の方からの労いの言葉を頂き、御正宮を後にする。内宮外宮両正殿の左手には、次期遷宮に向けた御敷地がひっそりと佇んでおり、皆、暫し足を留め見入っていた。遷宮の成功を願わずにはいられなかった。



その後、一向は一路長野県へ。

晩の懇親会は大変賑やかなものとなった。

奉曳式の達成感、充足感もあってか、皆晴れやかな表情で宴を楽しんでいるようだった。

翌日の五日は、妻籠を訪れた。

この地は重要伝統的建造物群保存地区としての指定を受けている。

その後仙台空港へ到着、解散式を以って二泊三日に及んだこの参宮旅行は終了となった。



江戸時代の佇まいを今に伝える妻籠地区

式年遷宮は、ただ単に神殿を新しく造り替えることを目的として行われるものではない。社殿はもちろん御装束、神宝などすべてを一新して若返りを図り、日本の国の「いのち」を新鮮にして、日本全体の若返り、永遠の発展を祈るものである。

それは、常に瑞々しい生命の輝きを求めて止まぬ日本の民族性を象徴するものでもある。

そしてまた、この遷宮は、日本国民総てが一体になって協力し、成功させてきた神事でもある。二年間に亘って行われるお木曳き行事には、全国から凡そ二十万人もの人々が奉仕に加わるという。一本の綱に心を合わせて御用財を両宮に運び入れるこの神事は、まさにそのことを象徴しているものであるといえよう。

第62回神宮式年遷宮

お木曳き行事(第一次)と南木曾昼神温泉と妻籠の旅

物事に利便性のみを追求する現代においては、
一見非効率的にすら思われる多くの行事にも、
先人たちの技術と伝統が込められている。
そして何よりも、千三百年もの永きによって引き
継がれてきた想い、そしてそれを我々が引き継ぎ、
更に後世に託してゆくという事そのものにこそ
重要な意義があるのではないだろうか。



報告 教化部 企画広報委員 尾形 知洋